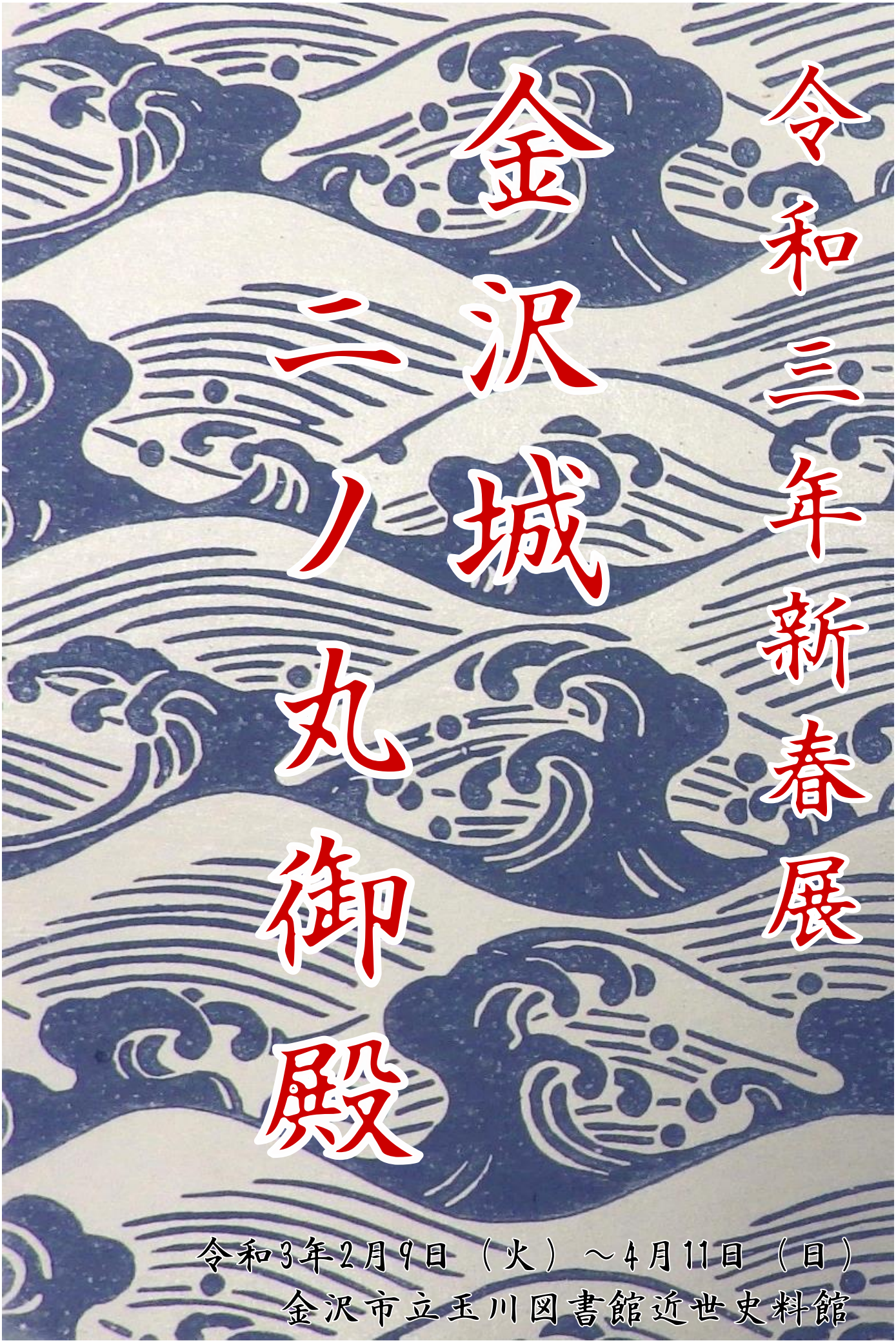


令和三年新春展

金沢城二ノ丸御殿

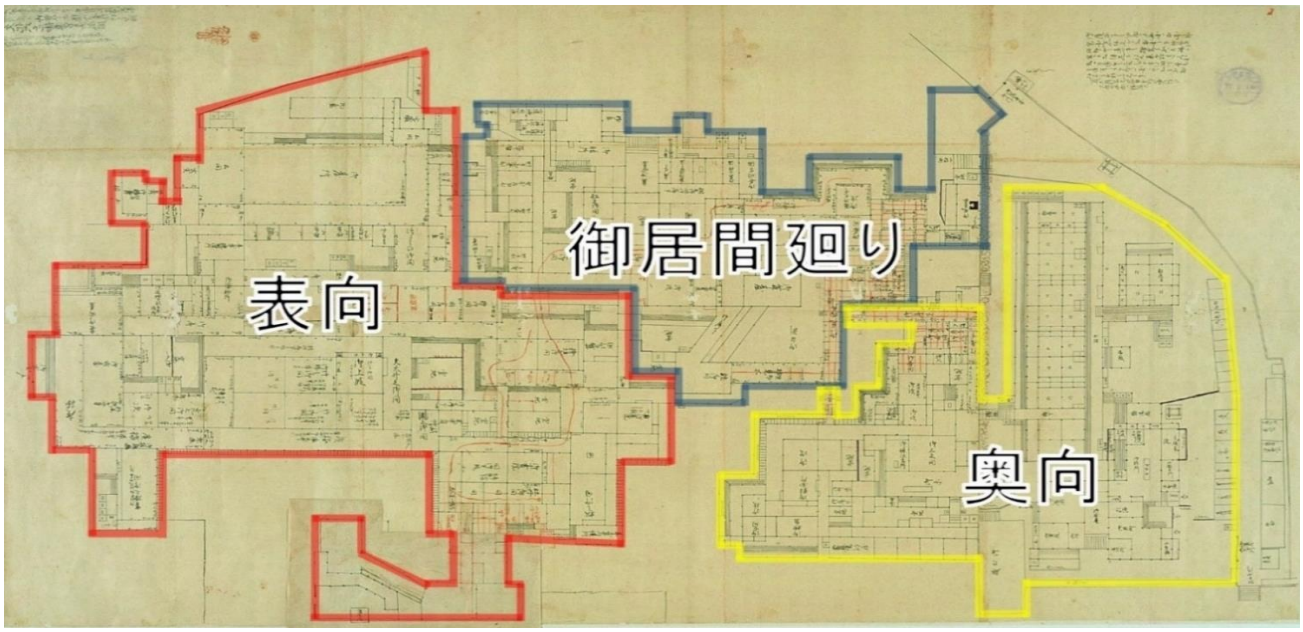
令和3年2月9日（火）～4月11日（日）

金沢市立玉川図書館近世史料館

はじめに

金沢城二ノ丸御殿は、年寄・家老などの家臣が藩政を運営し、諸儀式が多く行われた「表向」、藩主が生活し、政務を執った「御居間廻り」、藩主の側室・子ども・女中が生活した「奥向」の3つの空間にわかれ（下図参照）、その敷地は約3,200坪におよぶ。寛永8年（1631）に御殿が建てられて以降、数度の火災に見舞われたが、その都度再建され、また度々増改築も行われた。その後、明治4年（1871）に金沢城は兵部省の所管、翌5年に陸軍省の管轄となり、不用な建物は取り壊された。同8年、二ノ丸に歩兵第七連隊が置かれ、翌9年には第三連隊が新たに編成され、二ノ丸御殿内の諸部屋が利用された。そして、明治14年1月に御殿内から出火し、焼失した。

本展では、二ノ丸御殿の再建・増改築、諸部屋の利用の実態などについて、古文書・絵図を用いて紹介していく。



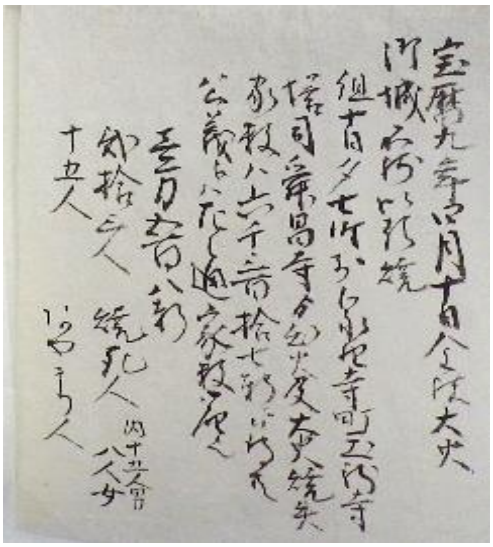
「金沢城二之丸御殿図」(16.18-31)　文化6年（1809）の再建途中に描かれた図面に加工。

1. 二ノ丸御殿の焼失・再建

寛永8年（1631）の金沢城下の大火により、金沢城の本丸をはじめとする城の中心部分が燃えた。その再建の過程で「芳春院丸」と呼ばれていた二ノ丸付近が拡張され、その後の二ノ丸御殿の原型となる御殿が建てられた。以来、増改築を繰り返しながら、二ノ丸御殿は存続した。以下では、宝暦9年（1759）、文化5年（1808）の大火によって焼失した二ノ丸御殿がどのように再建されたのかについて、火災の被害の状況とともにみていく。

(1)宝暦9年の大火

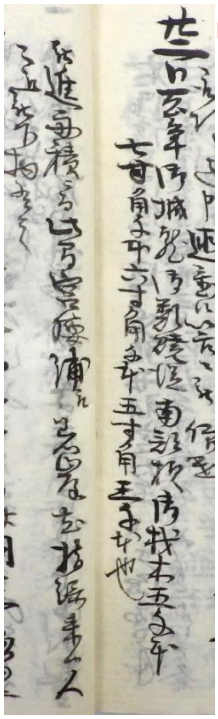
宝暦9年（1759）4月10日申刻（午後4時頃）、金沢泉野寺町で出火があった。強い南風により、犀川を越えて城下のみならず、金沢城の大半を焼いた。鎮火したのは、出火から16時間ほどを経過した11日の巳刻（午前10時頃）であった。この火災は、城内が焼失したことから「御類焼」と呼ばれた。



宝暦九年四月十日金沢大火
御城不残御類焼
但十日夕七時於泉野寺町玉龍寺
塔司舜昌寺ゟ出火及大火、焼失
家数八六千三百拾七軒ニ候得共、
公義江ハ左之通家数御届也
壱万五百八軒
弐拾三人　焼死人　内十五人男八人女
十五人　あやまち人

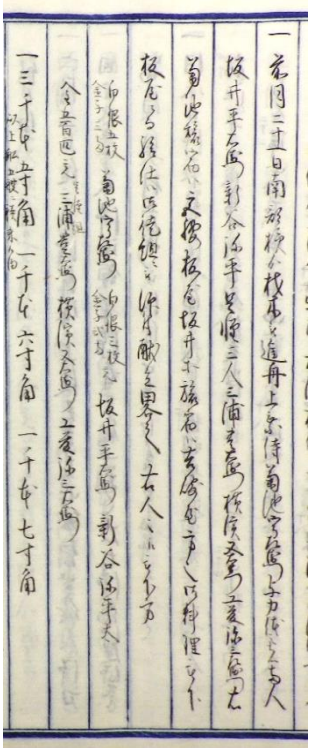
「覚書」(094.0-15)

宝暦の大火の被害状況を記した史料。火の元は、泉野寺町の舜昌寺であった。焼失家数は、約6,300軒であったが、公儀（幕府）へは約10,500軒で届け出ていた。また焼死人は23人、怪我人（「あやまち人」）は15人であったことがわかる。



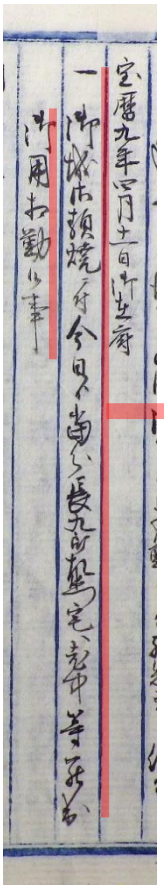
「政隣記」
（16. 28-11⑩）

廿二日　去年御城就御類焼、従南部様御材木五千本
七寸角千本、六寸角千本、五寸角三千本也
被進舟積二而此間宮腰浦江着岸、尤指添来候人
々江被下物有之



「泰雲公御年譜」（16.11-98②）

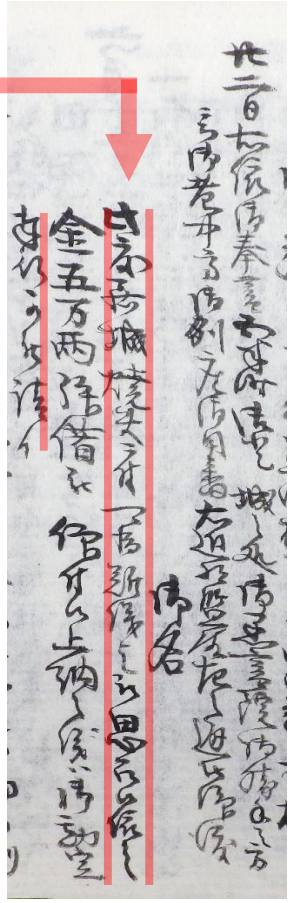
豊臣政権期、前田利家は南部信直と政権の取次役を勤めており、両家は古くから関係をもっていた。その縁もあって前田家と南部家の関係は近世を通じて続いた。例えば、6代藩主前田吉徳の養女繁姫は、盛岡藩主の嫡子南部信貞の室となっている。こうした関係もあり、宝暦10年（1760）5月には金沢城再建のため、盛岡藩主南部利雄から材木5,000本が贈られた。材木は船で運ばれ、宮腰に着岸している。この時の材木運搬に関わった家臣は、後に白銀などを拝領した（「泰雲公御年譜」）。



「留帳鈔録」（16.41-83⑤）

一、御城御類焼二付、今日ゟ当分長九郎左衛門宅へ老
中（年寄）等罷出御用相勤候事

宝暦の大火により、政治・儀礼の中枢だった二ノ丸御殿が焼失したため、当分の間、年寄長家の屋敷（現在の玉川図書館、玉川公園、三谷産業の一部）を藩政運営の場とした。



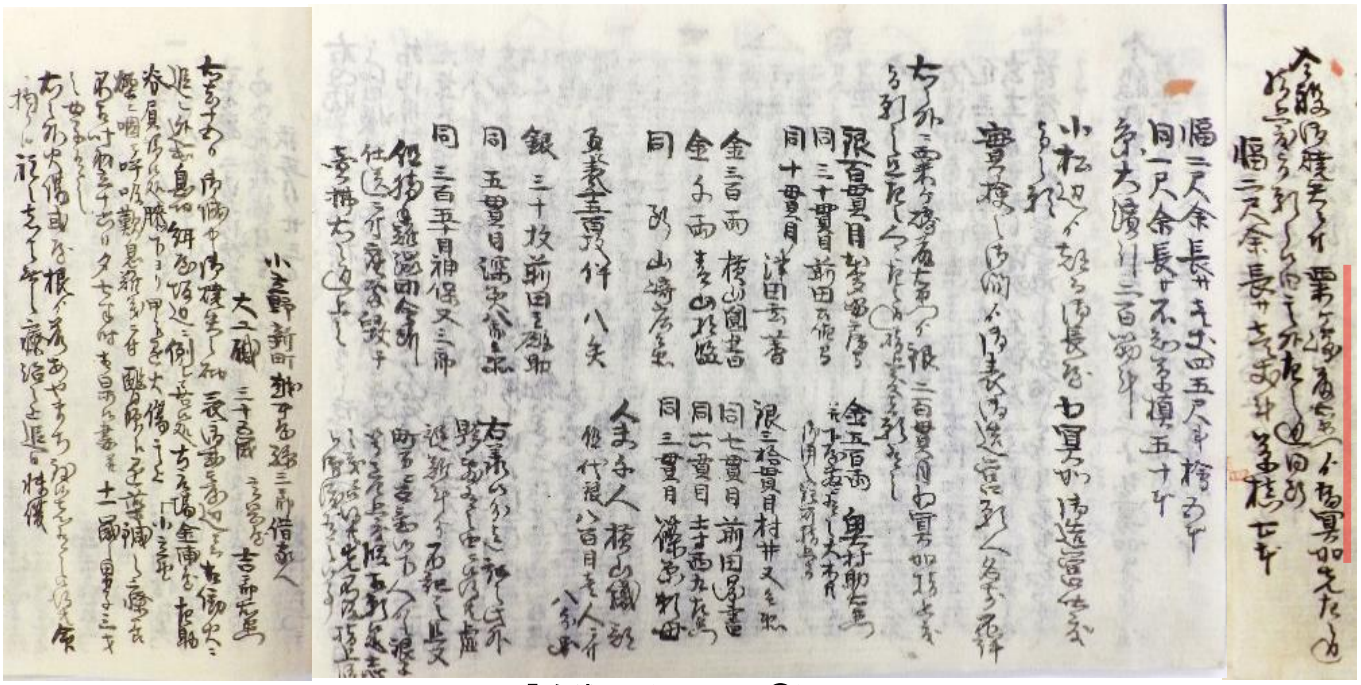
「政隣記」（16. 28-11⑩）

此度居城焼失二付、可為難儀与被思召候、依之
金五万両拝借被仰付候、上納之儀ハ御勘定
奉行可被請候

宝暦9年5月22日、大火で金沢城が類焼したことに対し、幕府から5万両の拝借を仰せ付けられたことを記した部分。翌月29日に聞番・会所奉行・大かね奉行が、この5万両を領収した。

(2)文化5年の大火

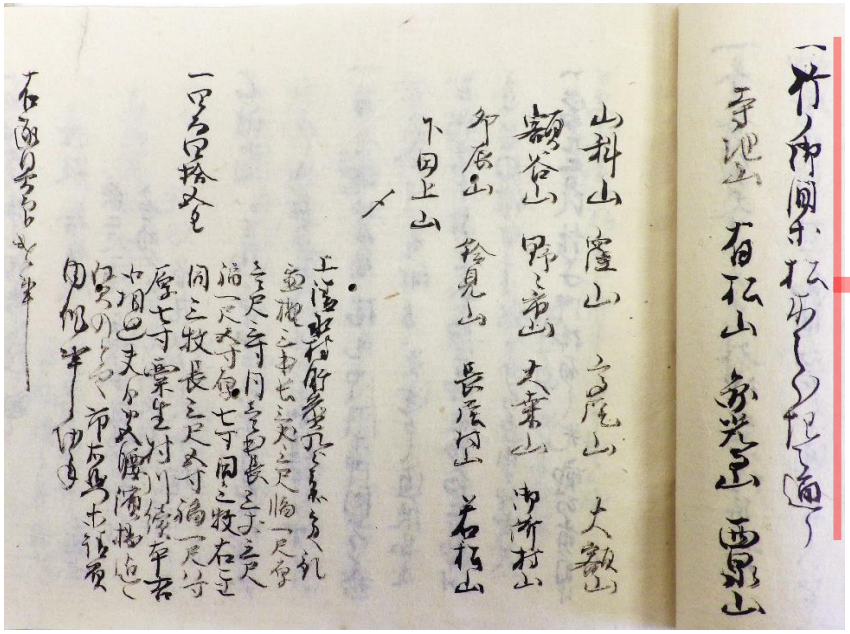
文化5年（1808）正月15日に二ノ丸御殿内で出火し、御殿全体が焼失した。翌16日の未明に鎮火したが、被害は二ノ丸御殿にとどまらず、橋爪門続・五十間長屋・菱櫓も焼失した。五十間長屋に保管されていた鉄砲類や書類などは鶴ノ丸に運び出され、間に合わないものは窓から堀に投げ込んだという（『よみがえる金沢城1』）。二ノ丸御殿の再建には、造営方役所が設けられ、同役所が中心になり進められ、家臣や領民からの献上銀・献上品の協力もあって、文化7年7月の同役所の閉鎖をもって再建終了となった。ここでは、この火災及び再建の様子をみていく。



粟ヶ崎藤右衛門ゟ為冥加

「政隣記」(16.28-11㉕)

二ノ丸御殿が焼失したことにより、粟崎村の豪商木谷藤右衛門は、材木の他、銀200貫を献上した。また、家臣から金銀・庭の大木などを献上したいと希望する者がいた。領内の町や村からも、金銀・竹木・器財・屏風類の他、広式女中用の漬物も消失したことから、3年糠漬大根1,000本献上したいという者もいたようである（文化5年正月23日条）。

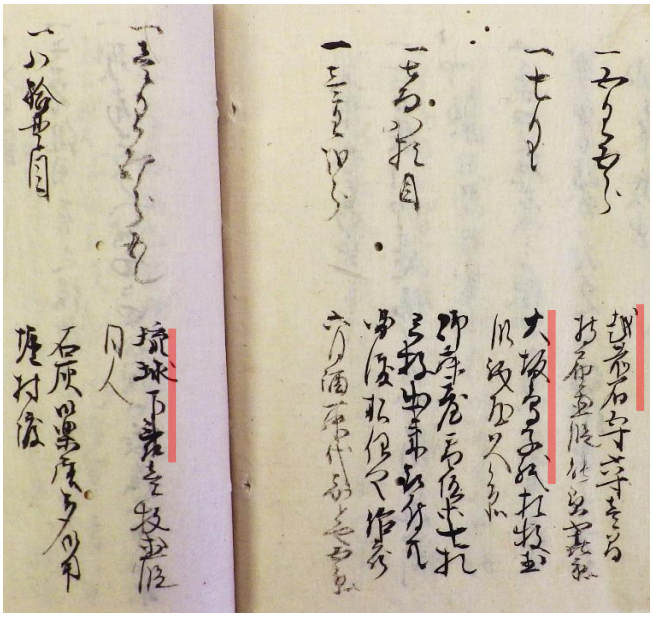


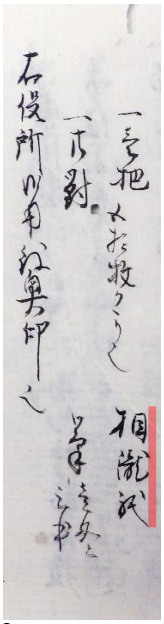
一、竹ノ御間等松木之分左之通り

「御造営方日並記」(16.45-14①)

「御造営方日並記」は、二ノ丸御殿再建の指揮を執った造営奉行の高畠厚定の役務日記である。

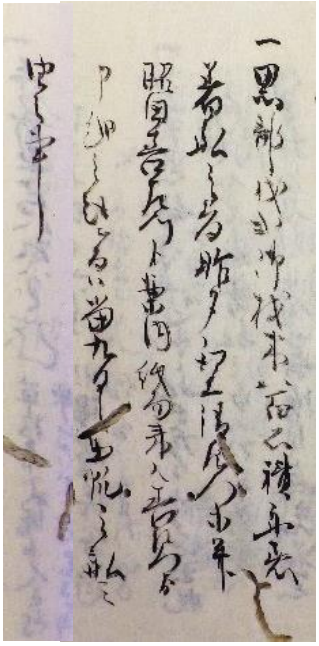
表向の竹之間（大広間）に使用する木材の産地が記されている。寺地、有松、専光寺、西泉、額谷、野々市などの地名がみられ、現在の金沢市内、野々市市で調達された松の木が使用されたことがうかがえる。





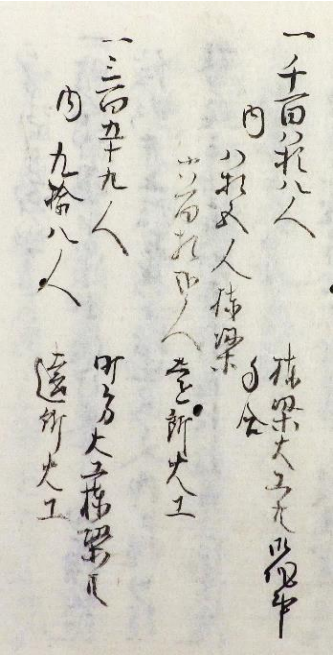
「御造営方日並記」(16.45-14⑮(左)、①(右))

再建にあたっては、全国から木材、石材が運ばれた。例えば、左の史料からは「越前石」「大坂鳥子紙」「琉球下表」（畳表）などがみられる（傍線部箇所）。もちろん、領国内からも多くの木材などが運ばれていた。左の史料からは相滝紙（現白山市、旧鳥越村）が使用されていたことがうかがえる。



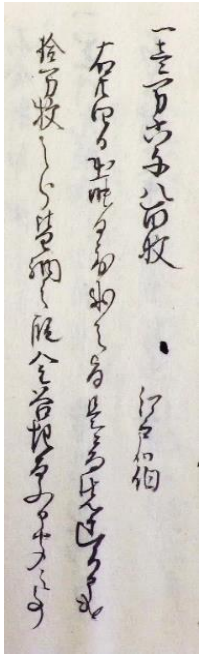
「御造営方日並記」（16.45-14⑧）

黒部からの材木も多く使われていた。左の史料からは、黒部の材木を乗せた800石積船が到着したことがわかる（文化6年8月11日条）。



「御造営方日並記」（16.45-14①）

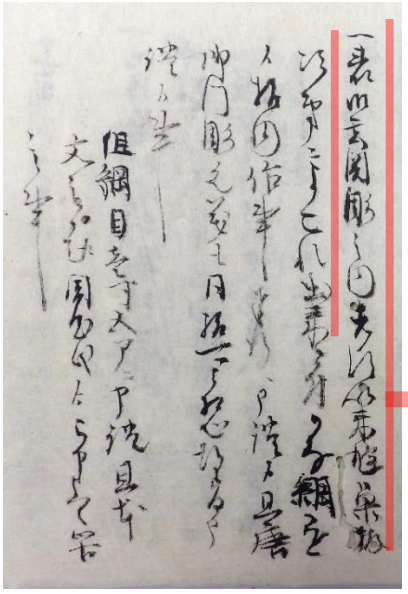
再建に関わった大工数が書かれている。棟梁大工・作事手合が1,188人（内85人が棟梁、612人が遠所大工）、359人が町方大工棟梁（内98人が遠所大工）であった。



「御造営方日並記」（16.45-14⑫）

近世初期では金沢でも箔打をしていたと考えられているが、元禄9年（1696）には幕府が箔座を設けて金銀箔の生産と流通の統制を図った。箔座自体は、宝永6年（1709）に廃止されたが、その後も箔の生産は、金座・銀座の統制下に置かれ、三都以外では認められなかった。

二ノ丸御殿の再建にあたっては、京都から7人の職人が来て、箔打をしていたが、それだけでは足りないため、江戸の箔屋から10万枚を注文していた。この分は、文化6年9月までには全て届いた。これは何度かにわけて送られたようであり、左の史料はその最後の分（1万6千8百枚）が到着したことを記したものである。その後、さらに5万枚を追加注文したという（以上、長山直治『加賀藩を考える―藩主・海運・金沢町―』）。



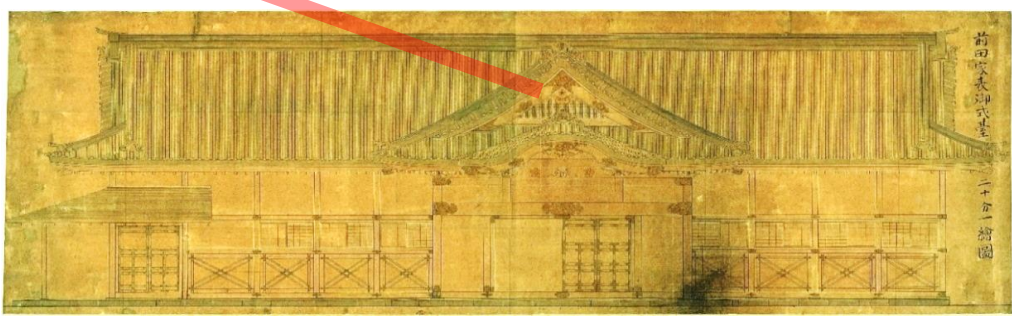
一、表御玄関彫之内、先頃以来鳩巣拵次第二よこれ出来

「御造営方日並記」（16.45-14⑮）

表御玄関の彫に鳩の巣が出来てしまい、汚れているので、金網を設置するよう内作事奉行へ命じたことがわかる。網目は、1寸5分（約4.5cm）であった。

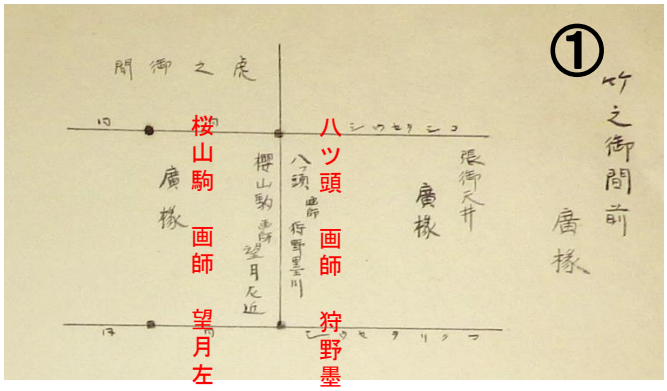
梅鉢紋の金具（6頁⑤）

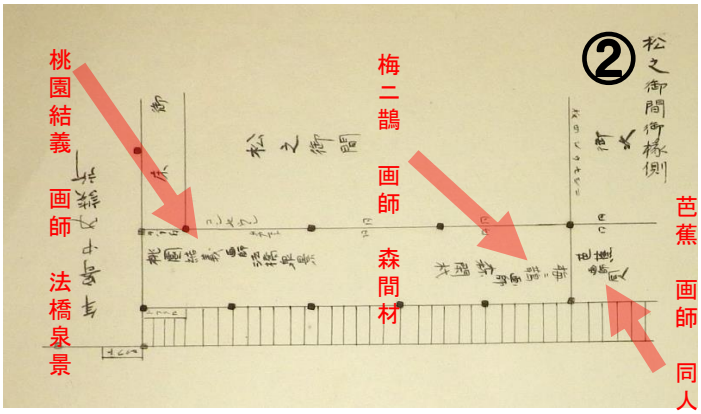
拡大

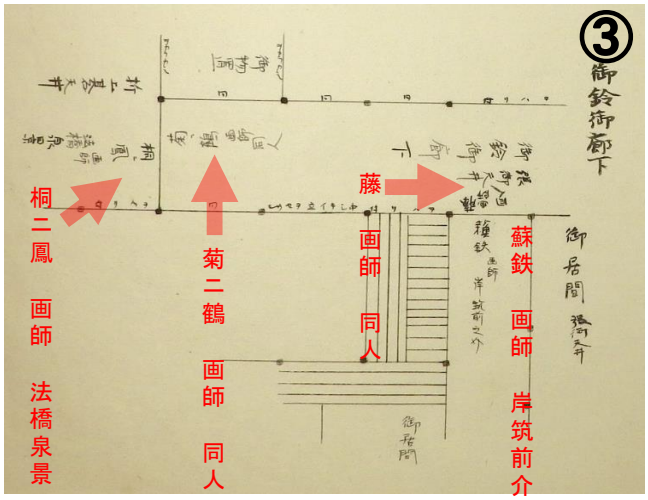


「金沢城二之丸御式台絵図」（16.18-34）

二ノ丸御殿式台の絵図。70×201.5cm。縮尺は20分の1。梅鉢紋の金具が施されていることが確認できる。





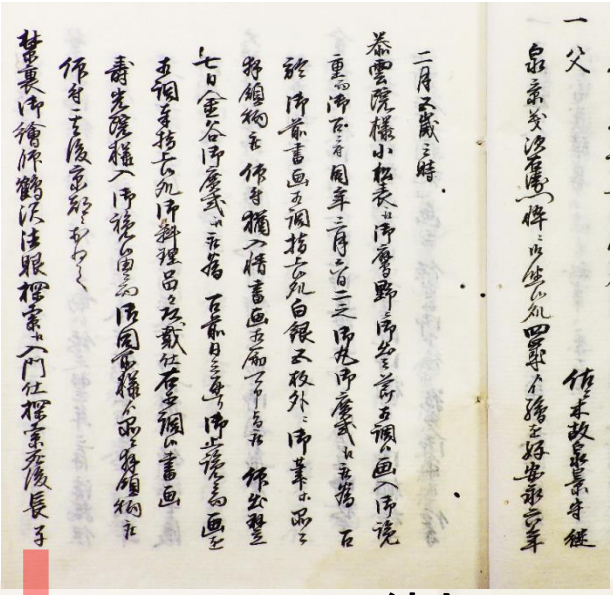


「金沢城二之丸御殿御杉戸絵画並ニ画師名」（13.0－35）

①竹之間前の広縁では、「八ツ頭」を狩野墨川、「桜山駒」を望月左近が描いている。

②松之間の縁側では、「桃園結義」を法橋（佐々木）泉景、「梅ニ鵲」「芭蕉」を森間材が描いている。

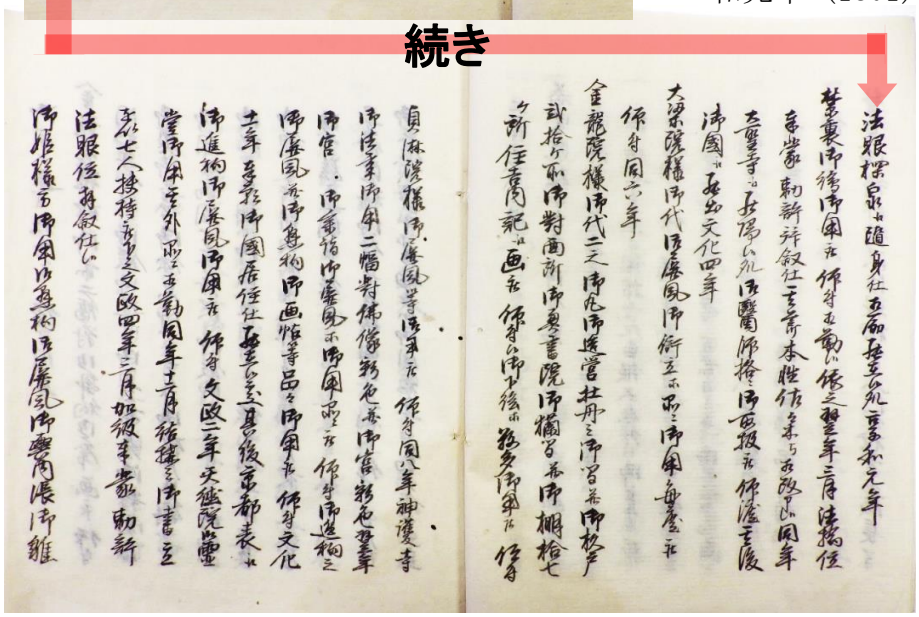
③鈴之廊下では、「桐ニ鳳（鳳凰）」「菊ニ鶴」を法橋泉景、「藤」「蘇（蘇）鉄」を岸筑前介が描いている。



「先祖由緒并一類附帳」佐々木泉玄（16.31-65）

再建には複数人の絵師が関わったが、ここでは、二ノ丸御殿の多くの杉戸絵・襖絵を描いた佐々木泉景の経歴を取り上げる。泉景は、安永2年（1773）大聖寺で生まれた。名は守継で、泉景は画人としての雅号。幼少の頃より画を好み、由緒書によれば、わずか5歳の時に描いた屏風絵が、鷹狩で小松を訪れた10代藩主重教の目にとまり、金沢城二之丸御殿御広式で褒賞をうけたという。その後京都に行き、狩野派の鶴沢探索門下となった。享和元年（1801）探索の禁裏御用の仕事を助け、屏風等に画筆をふるい、その功により翌2年3月朝廷から法橋位を拝叙した。これを機会に角鹿姓から祖先の旧姓佐々木に改めた。同年、大聖寺に戻り、その後、文化8年（1811）に金沢に移住した。そして、藩の仕事を中心に活躍し、嘉永元年（1848）9月、76歳で死去した。

続き

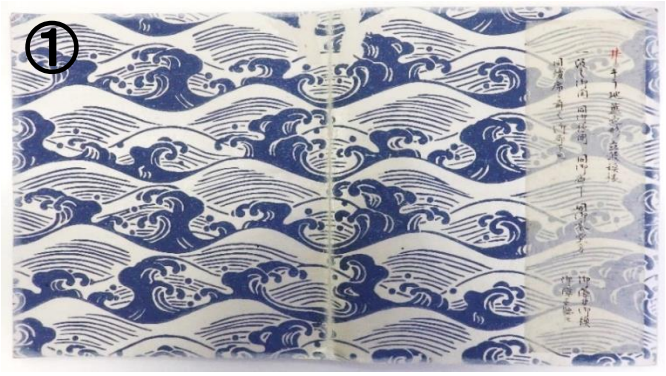


（以下、略）

（下）「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」（16.18-210②～④）

二ノ丸御殿が再建されて間もない文化8年（1811）正月に大工の井上庄右衛門がまとめた仕様書。

①

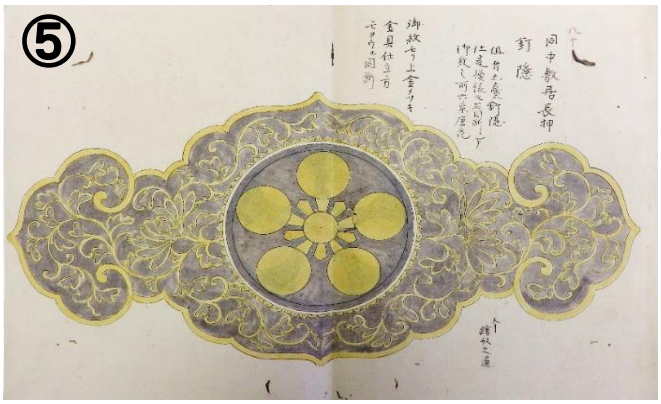


②

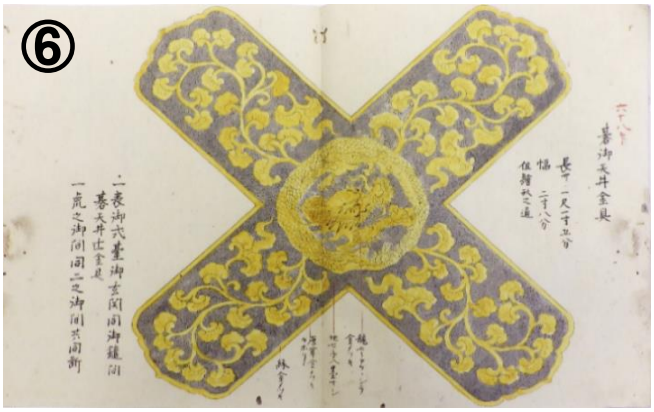
③

④

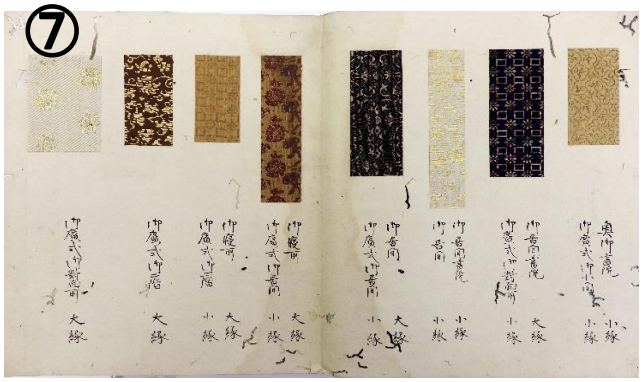
⑤



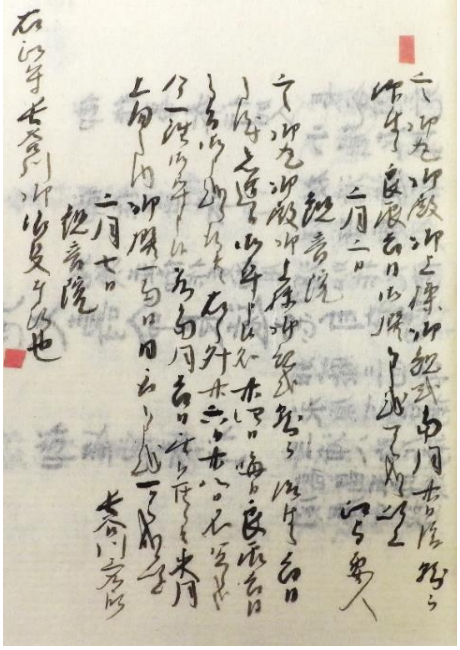
⑥



⑦



①は「キラ地藍色形立波模様」で、「波之御間、同御縁側、同御廊下、同御茶堂方、同続席々前之御廊下」の襖、障子の腰などに張られていた。②は「白鳥子紙金ニテ大菊桐模様」で、「御広式対面所、同御次、同縁側折廻」の襖に張られていた。③、④、⑤は釘隠の金具の仕様図である。③は竹之間に付けられたもの、④は広式の鈴之廊下、御居間、仏間、貞林院（10代藩主重教の側室喜機）の居間・湯殿・化粧之間などに付けられたもの、⑤は表式台中居の長押に付けられたものである。⑥は碁天井金具で、表式台玄関、虎之間に付けられていた。⑦は、小襖の縁布見本である。



「政隣記」(16. 28-11㉖)

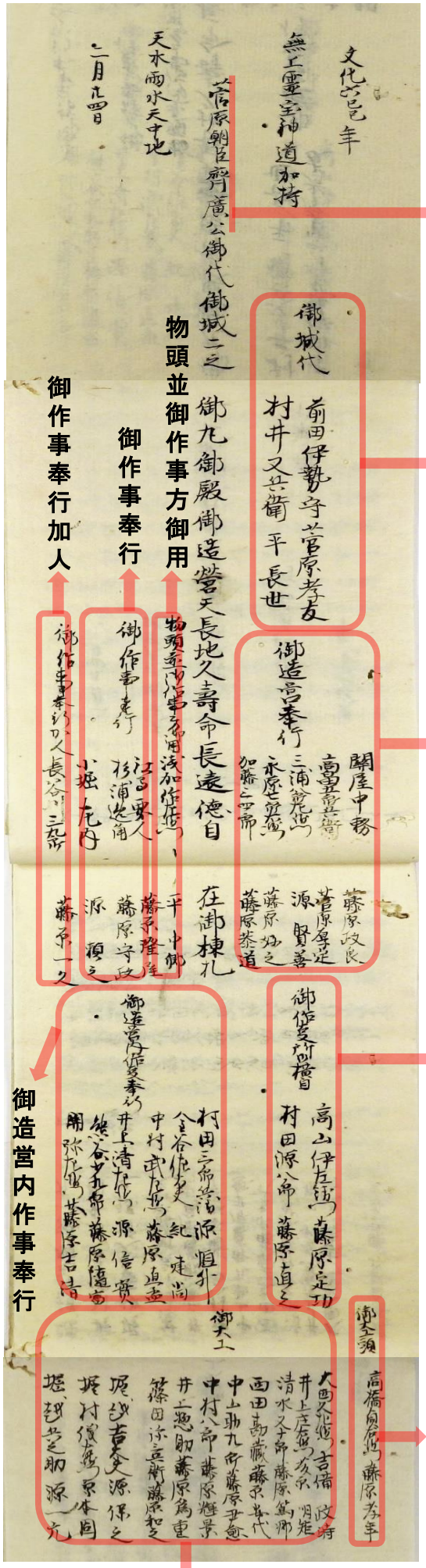
文化6年2月2日に、上棟式を行う日を観音院に命じて選定させていた。観音院からは、同月24日、晦日が吉日という回答を受けたが、作事奉行の長谷川三九郎から26日、28日は良くない日なのか、と問い合わせている（2月7日）。また、もし2月中に吉日がない場合は、来月上旬から1、2日選ぶようにと伝えている。

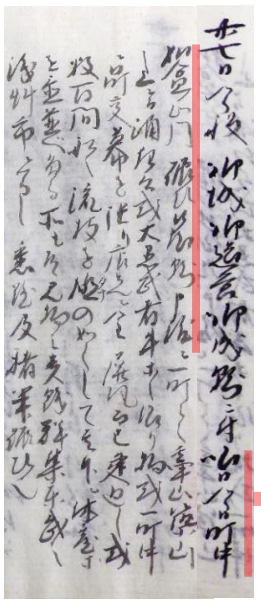
（左）「御造営方日並記」(16.45-14③)

文化6年2月、橋爪御門の上棟式が行われた際に納められた棟札を写したもの。再建に関わった、金沢城代・造営奉行・作事奉行・大工頭・大工などの名前が書かれている。この棟札は、高さ5尺1寸8分（約150cm）、厚さ6分4厘（約1.8cm）であった。

その後、同年4月には御殿の奥向・御居間廻りがほぼ完成し、藩主は仮の住居となっていた年寄本多家の屋敷から移った。

文化6年末までには、表御殿の作事は大方終了した。同7年には、内装や障壁画・欄間などの仕上げが行われ、京都から招かれた、岸駒・岸岱父子、江戸から招かれた狩野友益・墨川父子らの絵師による仕事も本格化した。文化7年7月に大広間周辺の内装が完成し、それをもって御造営方役所は閉鎖され、同12月で造営は終了となった。





「政隣記」(16.28-11㉘)

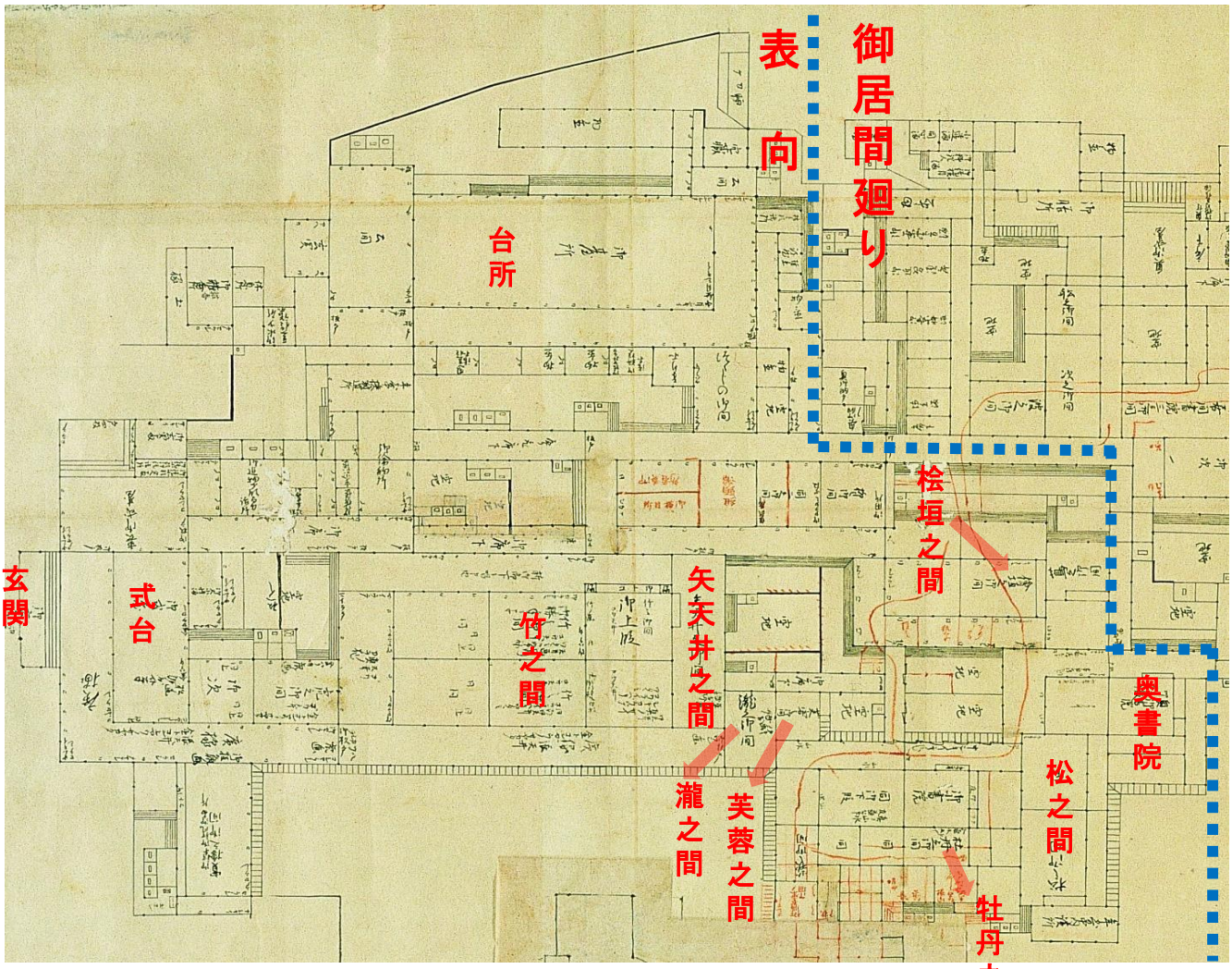
文化8年2月26、27日には、御殿の造営が終了したことにより、盆正月（藩主家の喜事に対し、庶民が仕事を休み、祝意を表すこと）が行われた。牽山・築山の上で踊り、狂言を行う者がおり、また大黒・武者・牛などの作り物もあったといい、大いに賑わっていたことがうかがえる。

昨日・今日
町中如盆正月賑ひ候様
就申渡

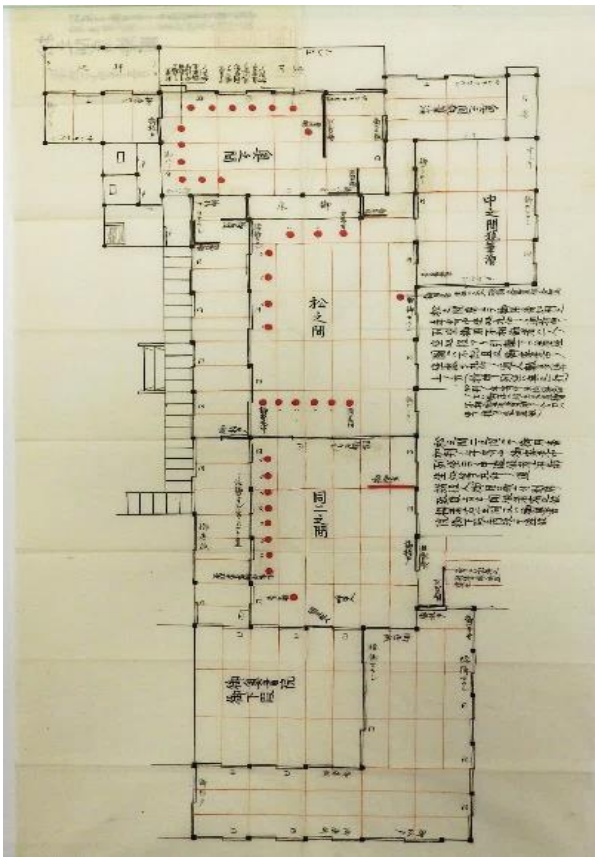
2. 各部屋の利用

ここでは表向、御居間廻り、奥向にあったいくつかの部屋を取り上げ、部屋の利用の実態などをみていく。

(1)表向



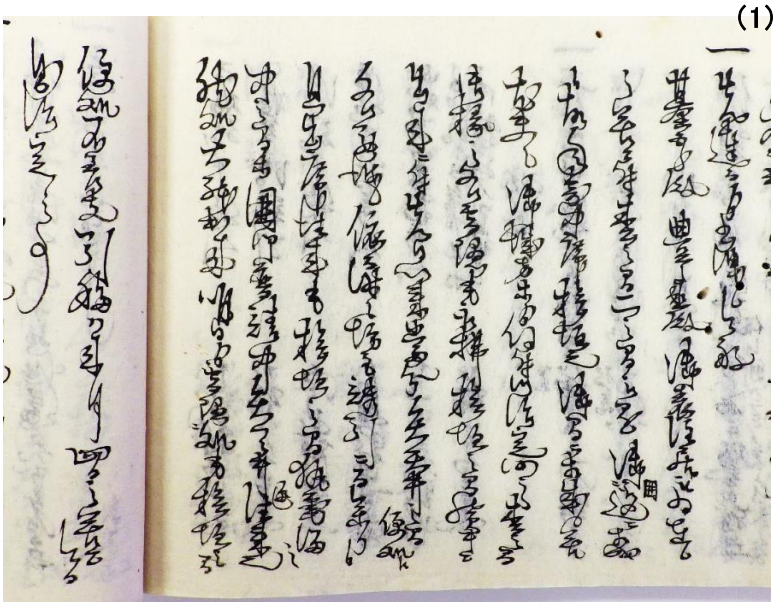
「金沢城二之丸御殿図」(16. 18-31)の表向部分



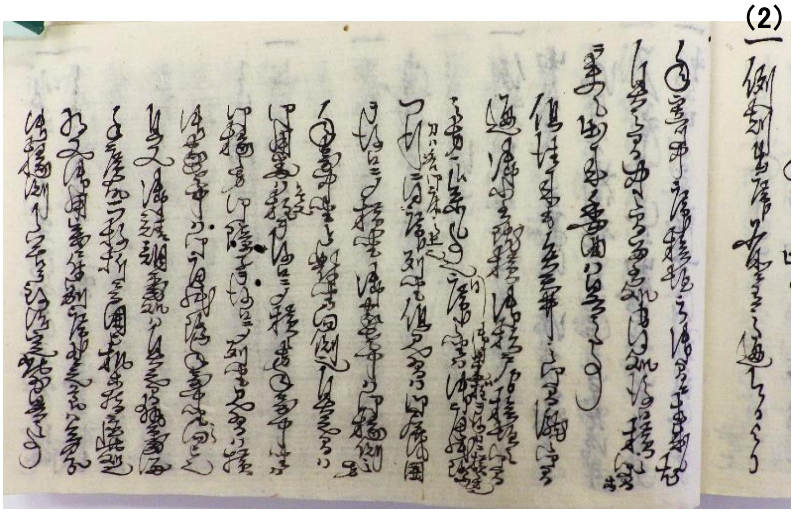
「松之間席絵図」(「用番方御絵図」、大1117⑩)

松之間は、年寄・家老が詰める役席であった。この絵図は、安政2年（1855）正月に、松之間において年寄・家老が着座した位置などを示したものである。特徴的な字体から、年寄奥村栄通が作成したものであると判断できる。

松之間二之間は、御用番が藩士の家督相続を申し渡す時などに使用されていた（奥村文庫「御用方手留、同附録」33）。松之間の奥にあった奥之間は、「年寄衆御内談所」とも呼ばれ、年寄の職務に関する重要な書類が保管されていた。その隣の「奥之間執筆溜」「中之間執筆溜」には、年寄中席執筆役が詰めており、年寄の仕事を補助していた。彼らは、算用者の中から選ばれたが、その中でも優秀な者であったと考えられる。職務内容は、先例の調査や文章の執筆などであった（加越能文庫「類聚御用番記」2）。



（1）



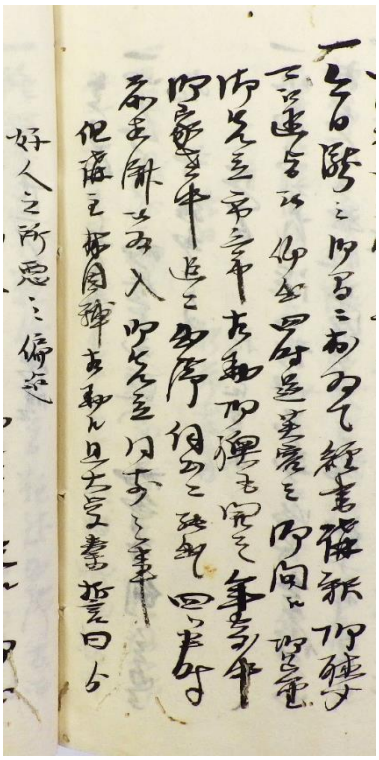
（2）

「官事拙筆」（094.0-72⑫）

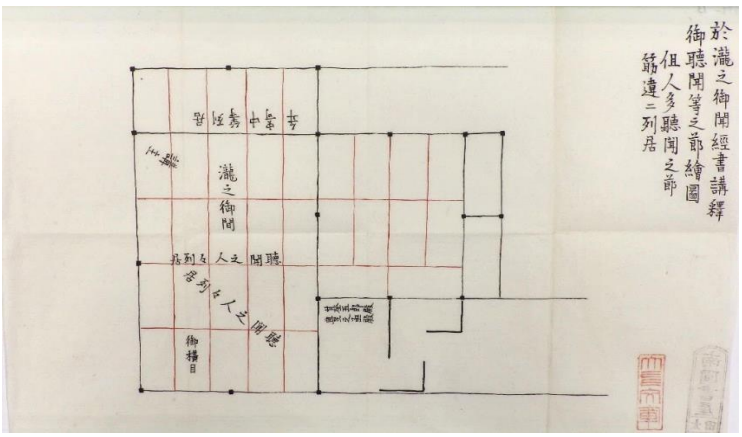
（1）年寄奥村栄通が記した日記の弘化3年（1846）8月29日の記述部分。藩主斉泰の子である基五郎（後の12代大聖寺藩主利義）・豊之丞（みつのじょう。後の13代大聖寺藩主利行）が成長したので、年寄・家老の役席であった松之間二之間に来月4日に移ることになったことが書かれている。それまで両人は広式（奥向）で生活していたが、基五郎が13才、豊之丞が11才になり、男子禁制（子ども以外）であった広式で生活できなくなり、表向に移ったものと考えられる。その影響により、年寄中席（加判の家老を含む）は一時的に桧垣之間となるはずであると書かれている。両人が松之間に引き移るにあたって、同間の縁側にあった雪隠（便所）が取り払われ、桧垣之間続に出来たという。それまでは矢天井之間の便所を使用していた。また桧垣之間には、年寄の勤めを補助していた執筆役の部屋も屏風囲いで作られた。

このように藩主の子が成長し、表向の諸部屋を一時的に使用することは複数回みられる。

（2）桧垣之間までは、矢天井之間、瀧之間を通り、小書院横の杉戸から入っていたことがわかる。また、桧垣之間内に御用番の年寄、その他の年寄、見習の年寄、家老がどのように座っていたのかが詳しく書かれている。



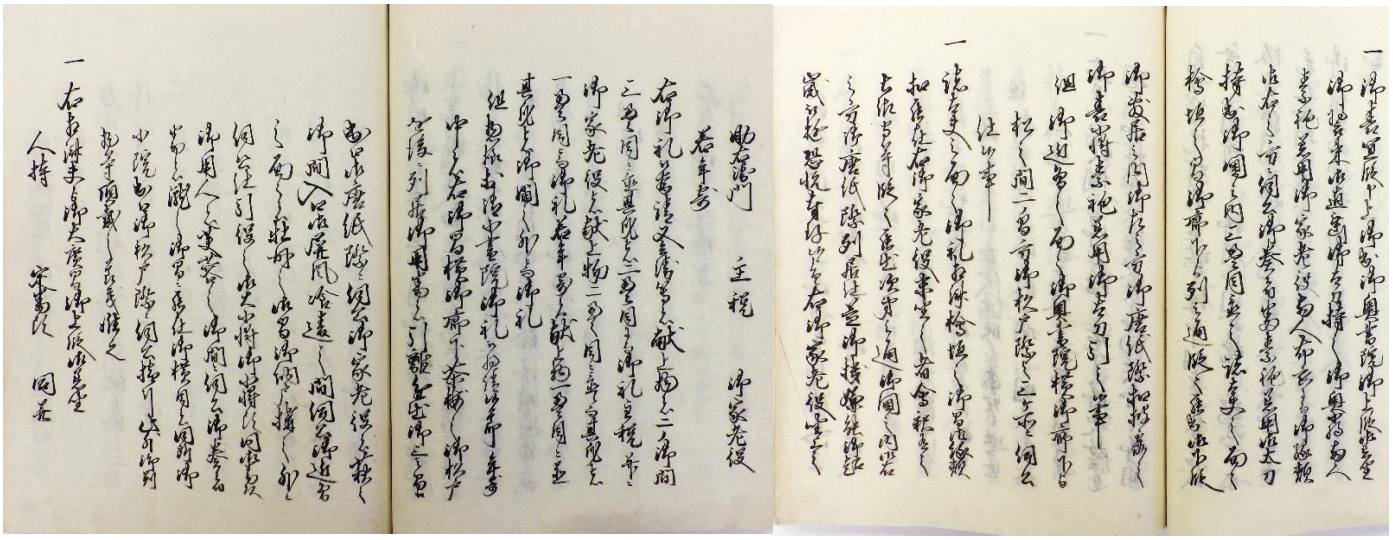
「横山氏日記」（16.41-130⑭）



「於瀧之御間経書講釈御聴聞等之節絵図」
（「用番方御絵図」、大1117⑬）

（左）文政4年（1821）12月23日、瀧之間において経書の講釈が催された。年寄・家老が出席し、瀧之間に着座し、藩主は同間の隣の芙蓉之間に着座し、瀧之間との間にある襖が開けられ、講釈が始まった。

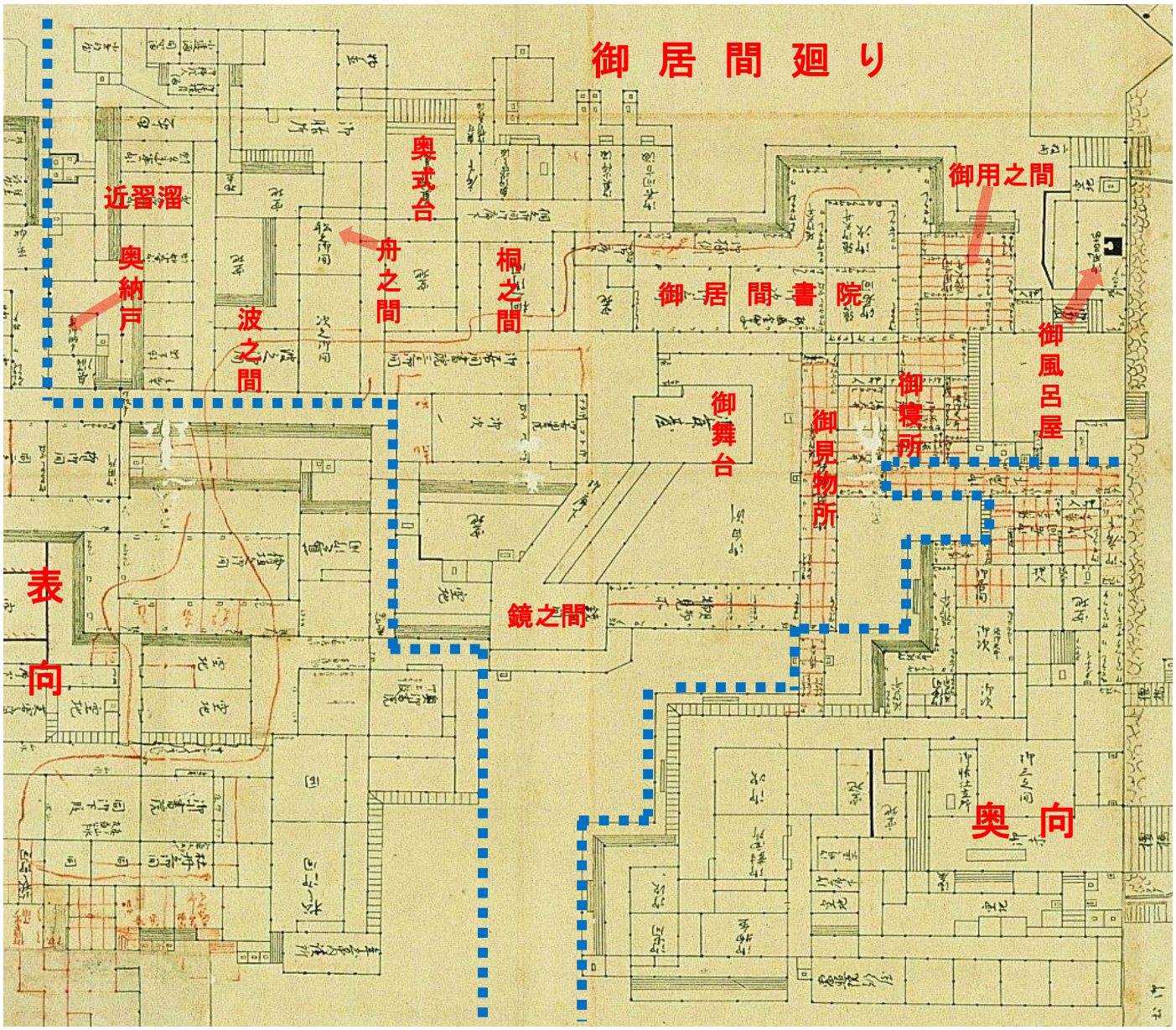
（上）瀧之間での経書講釈時の着座位置を描いた図。この時は、基五郎・豊之丞（13代藩主斉泰の子）が参加している。



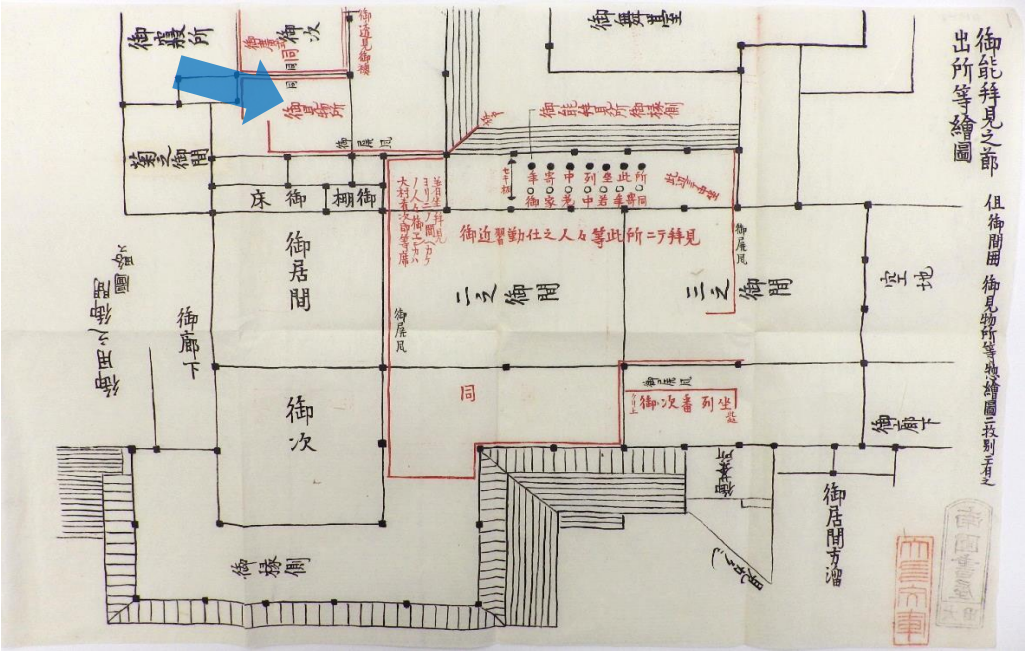
「北藩秘鑑」(16.23-44①)

二ノ丸御殿内での年頭御礼を記した部分。奥書院下段で諸大夫年寄が、上段にいる藩主に御礼をし、熨斗を拝領した。次いで、桐之間で藩主は鶴庖丁を見分し（実際の鶴庖丁は舟之間で行う）、小書院に移動し、諸大夫以外の年寄・家老・若年寄に会い、御礼をうけ、献上物も細かい作法通り置かれた。その後は、大広間に移り、人持・定番頭などの御礼をうけた。こうした御礼が身分により場所を変え、正月に何回も行われた。

(2)御居間廻り

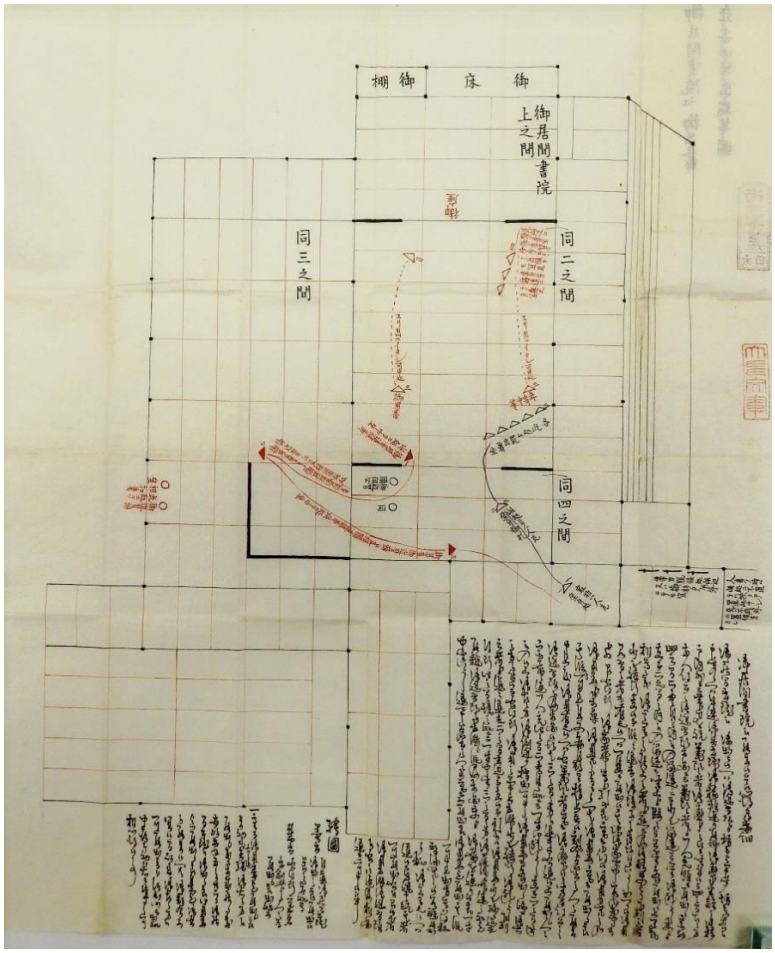


「金沢城二之丸御殿図」(16.18-31)の御居間廻り部分

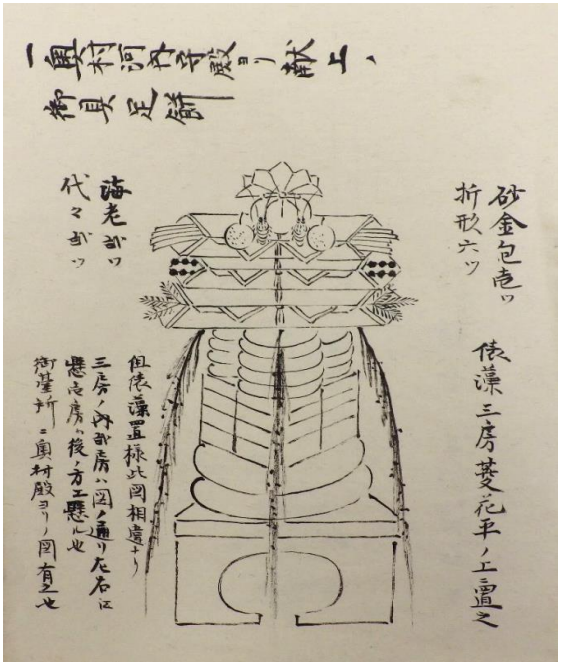


「御能拝見之節出所等絵図」(「用番方絵図」、大1117①)

二ノ丸御殿には、表向・御居間廻りに1つずつ能舞台があった。左の図は、御居間廻りにあった能舞台における能の拝見場所を描いたものである。御居間書院の縁側に年寄・家老・若年寄が着座していることがわかる。藩主は、自身が能を舞わない時は、寝所近くの屏風で囲われた矢印の箇所に着座し、見物していたと思われる。



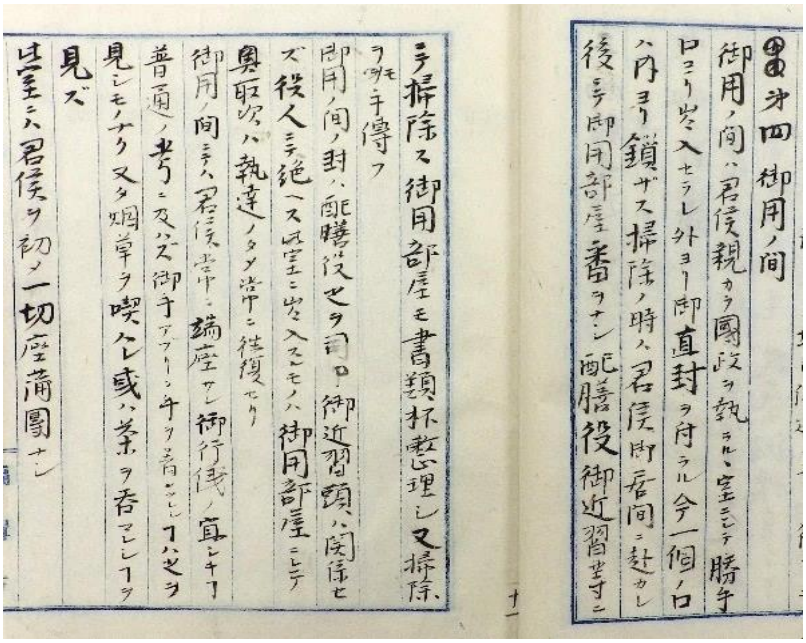
「御居間書院江御出之節年寄中等出処等図」
(「用番方絵図」、大1117⑰)



「前田侯年頭御具足餅飾様」(13.0-200)

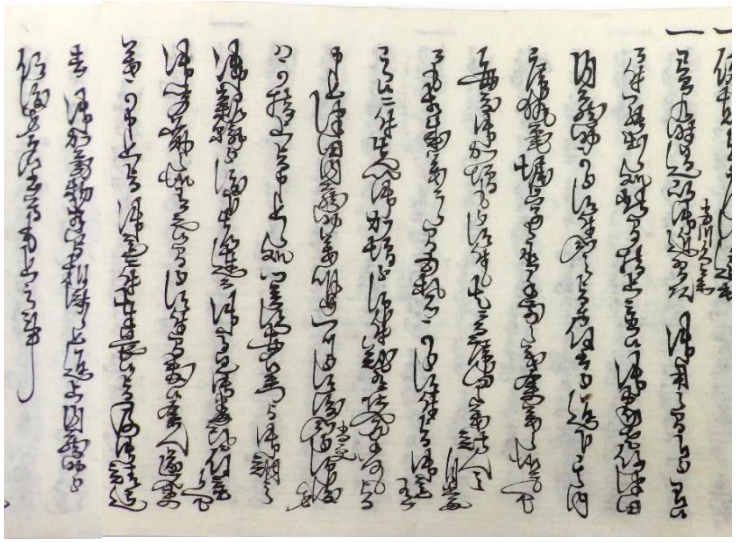
毎年年末には、年寄奥村宗家から藩主前田家に鏡餅が献上された。その鏡餅は、御居間書院に飾られたという（加越能文庫「御煤払御規式および御具足餅御飾図」）。

年寄らが御居間書院へ出る際の作法を記した図。記された文字の一部分には、以下のようなことが書かれている。藩主は上之間に座り、家臣は奥書院縁頬通りに出て、廊下に刀を置き、近習頭の合図を受け、一人ずつ四之間から入っていく。はじめは四之間二畳目に少し筋違いで着座し、御礼をして、それより立って二之間へ進み、筋違いに着座し、藩主から「天気相」など御意があり、座上の者がそれに応じた。次いで、下列之者から膝行立で退去したという。なお、御居間書院は、年寄らが役職任命される時などにも使用された。



「小川清太見聞録」（16.28-187）

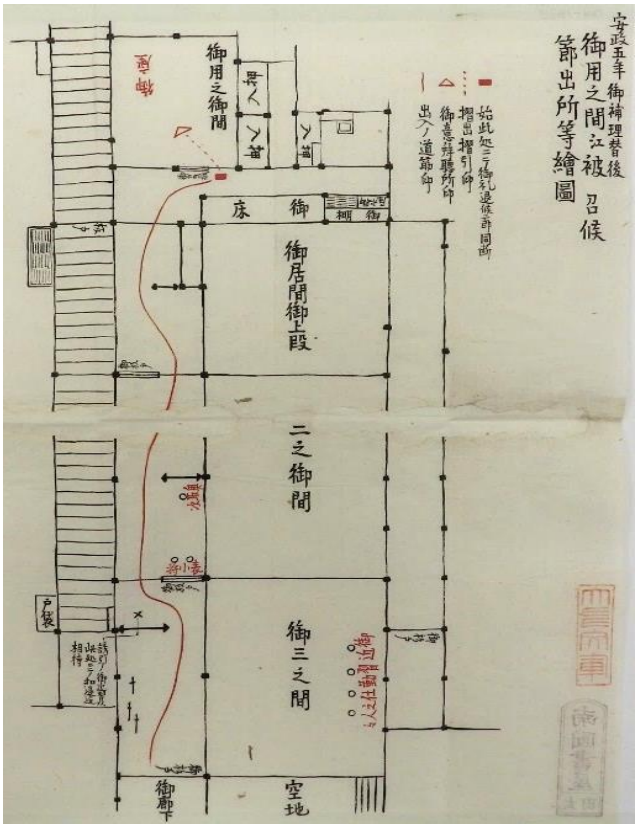
「小川清太見聞録」は、清太（藩主斉泰の近習）が実際に見聞したことを近藤磐雄（前田家編纂方）が書きまとめたものである。内容は、藩主斉泰の事跡が中心である。同史料には、御用之間は、藩主が国政を執る場所で、同間では、藩主は常に姿勢正しく座り、行儀がよく、煙草を吸ったり、御茶を飲んだりするところをみなかったと書かれている。また、この部屋には座布団は一切なかったという。



「官事拙筆」（094.0-72㊶）

（右）藩主が主に政務をとっていた場所は、御用之間であった。家臣は、御居間書院三之間の横で、脱刀し、御用之間へ向かい、部屋に入る前に御礼をし、すり足で藩主の前まで進んでいたようである。

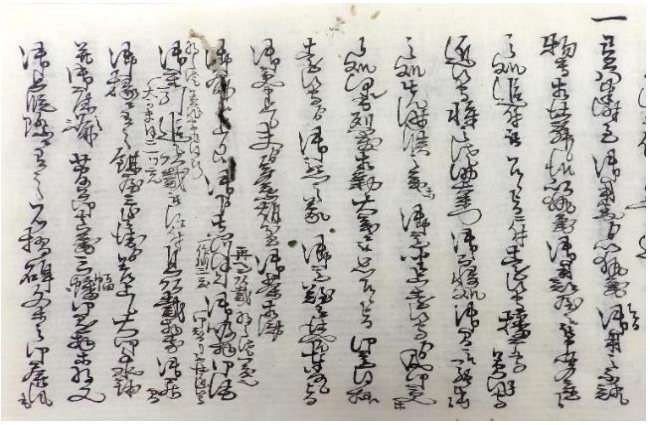
（上）御用之間に召される時は、近習御用から伝えられた。例えば、御用之間では家老役の任命や執筆役の加増などについて、年寄は藩主から直接意向を聞いていたことがわかる。

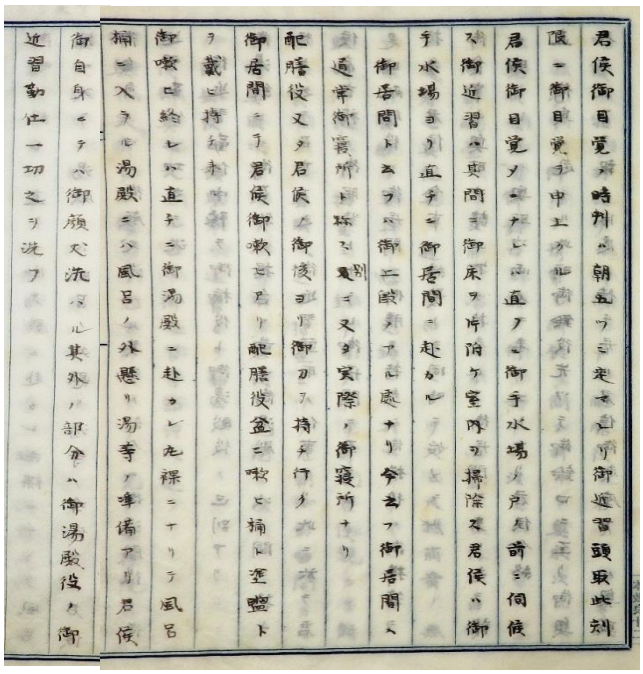


「御用之間江被召候節出所等絵図」
（「用番方絵図」、大1117⑮）

「官事拙筆」（094.0-72⑬）

（右）藩主が寝起きしていた寝所にも、年寄らは時々出入していた。御用番の年寄から執筆を通じて示談の品が終わったことを近習御用に伝えると、後で他の年寄とともに寝所に召されたことが書かれている。そこでは御茶や吸物を頂戴したという。



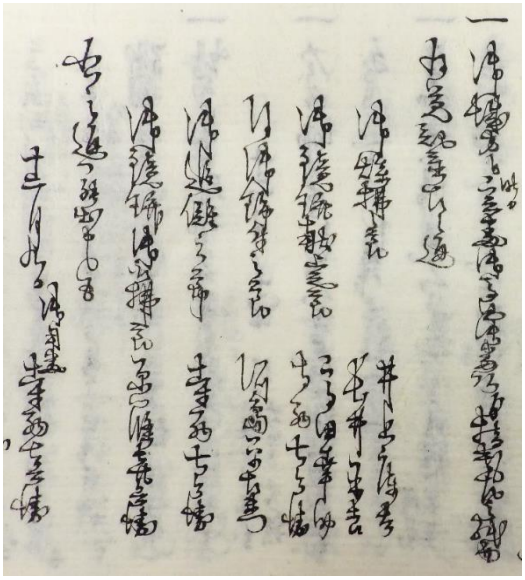


「小川清太見聞録」(13.0-197)

「小川清太見聞録」収録の藩主の日常生活が書かれている部分。その一部始終を示すと以下の通りである。

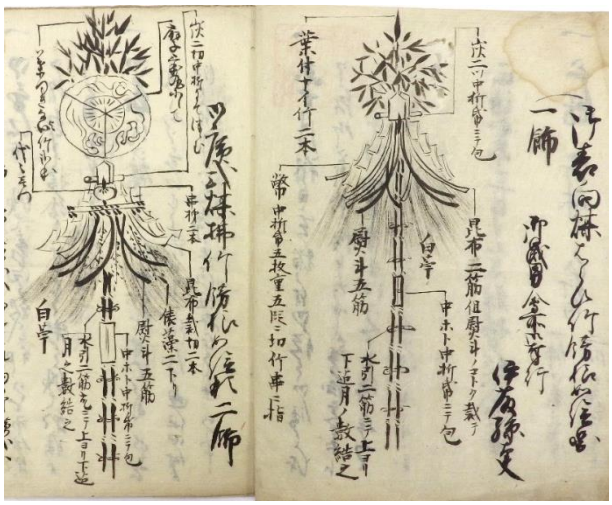
午前8時頃になると、近習頭が藩主を起こしにくる。藩主は目覚めると御手水場に行き、近習はその間に寝床を片付け、室内を掃除する。寝所に戻り、うがいをし、その後、湯殿へ向かい、風呂に入る。湯殿には風呂の他、かけ湯などが準備されていた。藩主は、顔だけ自分で洗い、その他の部分は御湯殿役の近習が全て洗うことになっていたという。

(1)



「官事拙筆」(094.0-72⑰)

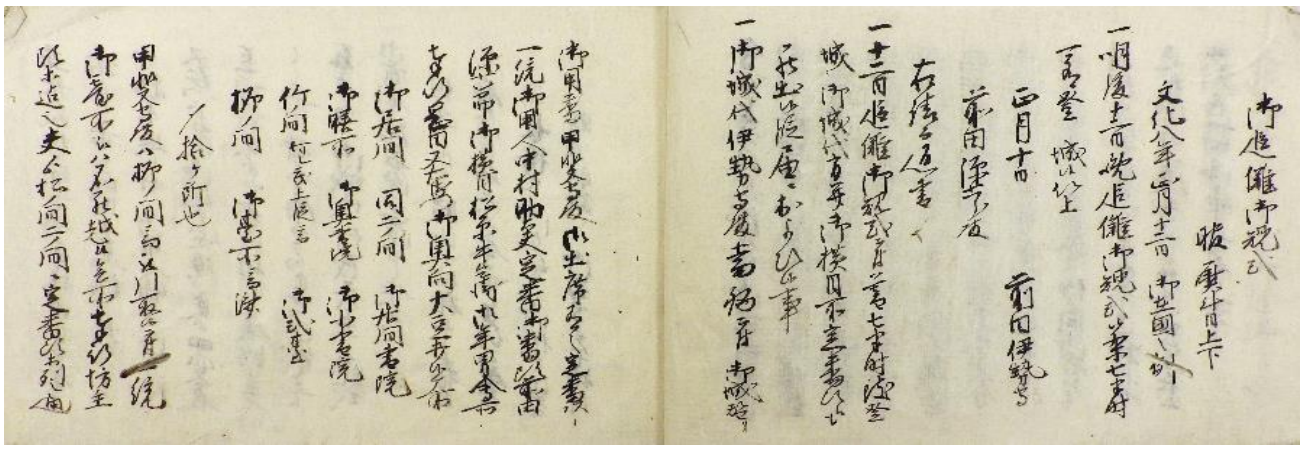
(2)



「御煤払御規式および御具足餅飾図」(16.14-27)

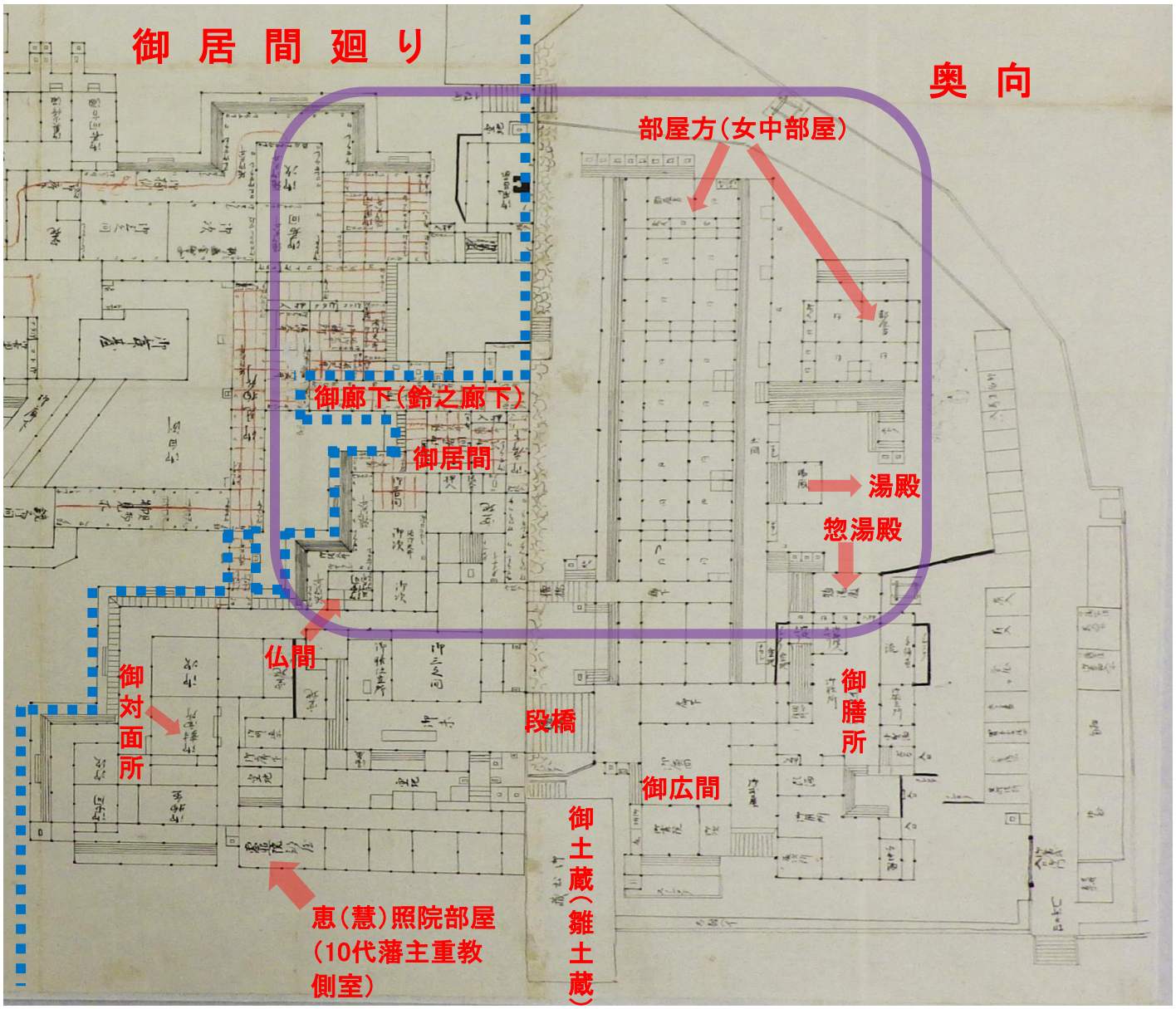
「御煤払・御追儺等留牒」(16.14-26)

(3)

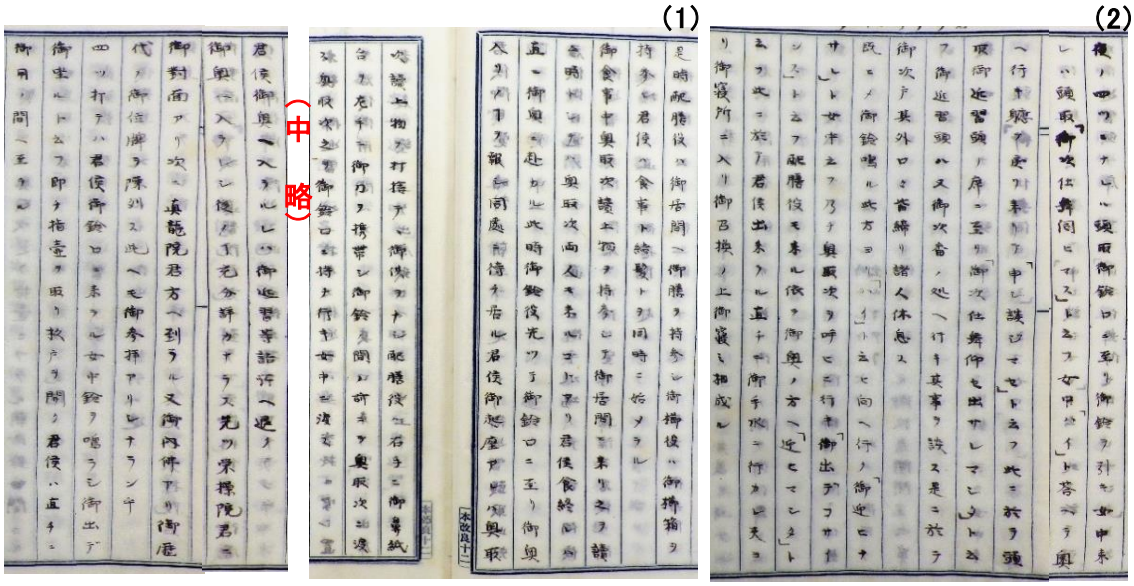


二之丸御殿内では様々な儀式が行われていた。（1）には、煤払い、鏡餅献上・取り払い、追儺などの儀式に関わった定番馬廻番頭の名前が書かれている。年末の儀式である煤払では、その時の年男となった会所奉行の者が装飾を施した煤払竹（2）をもって儀式が行われた。一年の厄を祓う目的もあったという。実際の煤払は足軽等が行っていたという（加越能文庫「北藩秘鑑」①）。追儺は、鬼遣（おにや）らいとも呼ばれ、これも会所奉行の年男が勤めた。毎年正月に行われており、（3）からは、広式の御居間、同二之間、御居間廻りの御居間書院、御膳所、表向の奥書院、小書院、竹之間、式台、柳之間、台所で行われたことがわかる。これには金沢城代、定番頭、年男の会所奉行などが参加し、各場所で大豆がまかれた。

(3)奥向



「金沢城二之丸御殿図」(16.18-31)の奥向(広式)部分

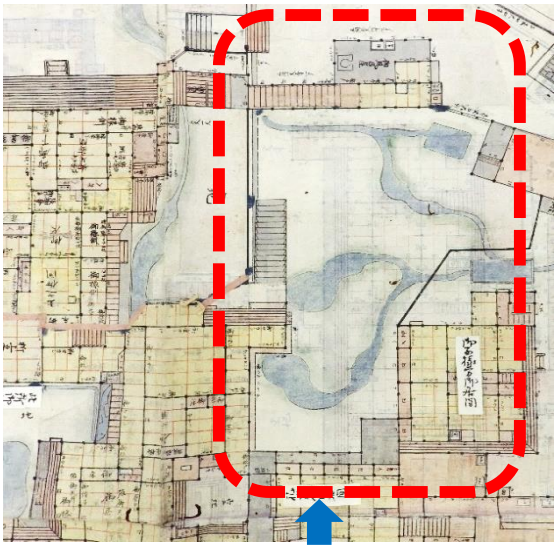


「小川清太見聞録」(13.0-197)

藩主が奥(広式)に行く時の作法が書かれている部分。(1)には、朝食後に奥に行く際のことが書かれている。藩主が奥に行く時は、事前に御鈴役が、「御奥入」のことを鈴之廊下の入口に行き、知らせた。藩主の鼻紙台や刀は配膳役がもち、鈴之廊下の前で奥取次役に渡し、同役が廊下口で女中に渡した。奥での様子は不明だが、栄操院(12代藩主斉広側室八尾)や真龍院(斉広正室隆)に会っていたという。(2)には、御用之間での仕事が終わり、午後10時に奥に行く際の手順が書かれている。近習頭と女中が鈴之廊下口で遣り取りし、状況を確認して、藩主が行き来していたことがうかがえる。このように、御居間廻りと奥向は、鈴之廊下によってつながっていた。廊下には、鈴が付けられており、近習・女中が互いに呼ぶ際にそれをならしていた。

「二ノ御丸御広式御居間遠望図」(24.2-4)　金沢市指定文化財

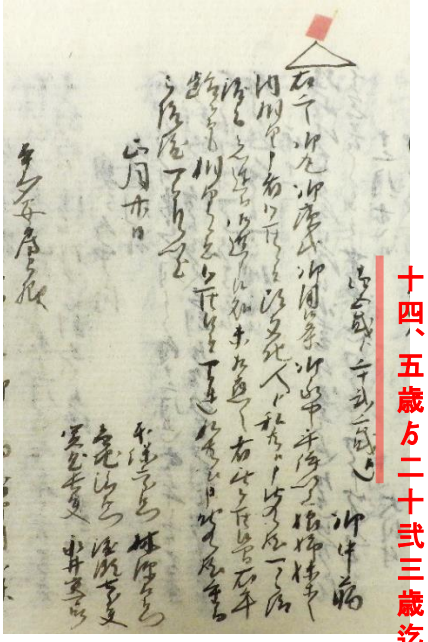
安政5年（1858）藩の御抱絵師佐々木泉景の子泉玄が、二ノ丸御殿広式からの遠望を描いたものである。盆栽、流泉、小亀がみられる。



「二之丸御殿絵図」(16.18-211)の一部を拡大

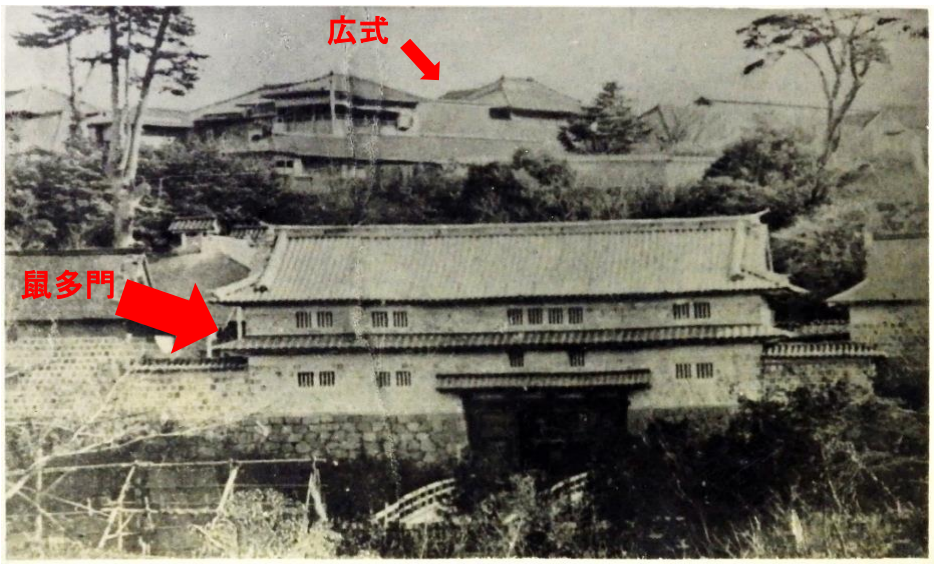
（左）文化6年以降の絵図に改修部分を上貼りしたもの。改修は、安政2年頃に終了したという。上の佐々木泉玄が描いた絵図は、矢印の箇所からみた景観であったと考えられる。絵図に描かれた範囲は大方点線で囲った部分である。

なお、前頁の実線で囲った箇所が、左の図の範囲にあたる。大規模に改修されたことがうかがえる。



「政隣記」(16.28-11㉖)

文化6年正月20日、広式に奉仕する中臈（ちゅうろう。女中）を募ったことを記した史料。家臣の平士以上の娘・姉・妹で、年齢は14、5歳～22、3歳に限定されていたことがわかる。女中は、御殿西側の「部屋方」（前頁絵図参照）で生活していた。



「鼠多門」(「金沢城門等写真」)(13.0-87①)

写真奥に再建後の二ノ丸御殿の広式（奥向）付近が写っている。時期は、明治初年であろう。手前は鼠多門である。

主な参考文献
・『金沢市史　通史編2近世』（金沢市、2005年）
・『よみがえる金沢城1』（石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室、2006年）
・『よみがえる金沢城2』（石川県金沢城調査研究所、2009年）
・長山直治『加賀藩を考える―藩主・海運・金沢町―』（桂書房、2013年）